

青年の進路選択時のきょうだいのとらえ方と アイデンティティプロセスの関連

福田 春花

問題と目的

アイデンティティとは、個人が自身の内側に斉一性と連続性を感じることに、それらを他者が認めてくれるという事実の知覚である (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011)。アイデンティティ形成は、青年期の重要な発達課題とされている (古見・西尾, 2022)。

Crocetti et al. (2008) によって開発されたアイデンティティの3次元モデルは、以下の3つのプロセスからなるサイクルとして概念化されている。コミットメントは、青年が発達の各領域に対して行った選択とそれらから生じる自信を表す。深い探求は、現在のコミットメントについて熟考したり、更なる情報を収集したり、他者と話をしたりする程度を表す。コミットメントの再考は、現在のコミットメントに満足できないため、青年がそれを放棄したり新たなコミットメントを求めたりすることを指す (畑野・杉村, 2014)。

青年のアイデンティティ形成には、自身にとって重要な他者からの視点が必要不可欠である (杉村, 1998)。親子関係と同様に、日常生活に欠かせない存在であるきょうだいとの関係も青年のアイデンティティ発達に影響を及ぼす可能性が指摘されている (Crocetti et al., 2017)。しかし、きょうだいとの関係とアイデンティティ発達の関連を調査した研究は少ない。

進路選択は、その後の人生に影響を与えるライフイベントであり、青年のアイデンティティ形成にも関連している (若松, 2012)。特に年上のきょうだいは、家庭内の他の子供の学校や職業選択に重要な影響を与える可能性がある (Schultheiss et al., 2002)。しかし、これまでの研究では、青年のアイデンティティ形成に関わる特定の場面におけるきょうだい関係との関連は調査されていない。青年にとって身近な存在であるきょうだいとの関係を特定の場面において調査することは、青年のアイデンティティ形成に関する新たな様相を明らかにすると考えられる。

そこで本研究では、具体的な場面の一つとして、青年の進路選択場面を取り上げる。学生生活サイ

クル理論 (鶴田, 2001) によると、進路選択は、大学4年間の中間期である2・3年生が直面する課題の一つとされている。また、年下のきょうだいは年上のきょうだいに養育や指示を求めることが示唆されている (Tucker et al., 1997)。そのため、本研究では年上のきょうだいがいる大学2・3年生を対象に調査を行う。青年のきょうだいのとらえ方として、きょうだいへの同一視ときょうだいからの心理的分離を扱う。同一視は、意識的な理想視としてのモデル化を表す (若原, 2003)。心理的分離は、対象との一体感から分離して自己を築いていることを示す (水本・山根, 2011)。

きょうだいをモデルとして捉えるということは、きょうだいの進路選択に対して肯定的な感情 (きょうだいのようにになりたい等) を抱いている可能性が高いため、きょうだいと同様の選択をすることが青年の自信に繋がることが考えられる。そのため、現在のコミットメントに満足している状態であり、それについて考えたり、更なる情報を収集したりする機会が減ると推測される。また、青年期はきょうだいから心理的に分離し、自己を確立するための様々な選択を行い、可能性を検討することが考えられる。

本研究の目的は、青年の進路選択時のきょうだいのとらえ方が、アイデンティティプロセスにどのように関連しているかを検討することである。仮説は以下のとおりである。

H1: きょうだいへの同一視を示すことは、コミットメントと正の関連があり、深い探求およびコミットメントの再考とは負の関連がある。

H2: きょうだいからの心理的分離を示すことは、コミットメントおよび深い探求と正の関連がある。

方法

参加者 進路選択の際に年上のきょうだいを進路選択に関する考えの基盤としたと報告した大学2・3年生96名 (男性38名, 女性54名, その他4名, $M_{age}=20.56, SD=1.05$) を分析に用いた。年上のきょうだいとの年齢差の平均は、3.77歳 ($SD=2.95$) であった。

調査内容 (a) 若原 (2003) によって作成された親子関係尺度の同一視—モデル (父親用, 5 件法, 4 項目, $\alpha = .90$) の「この人」という表現を「兄姉」, 「男性像」という表現を「将来像」と変更して用いた。(b) 水本・山根 (2011) によって作成された母子関係における精神的自立尺度の下位尺度である母親からの心理的分離 (5 件法, 5 項目, $\alpha = .73$) の, 「母親」という表現を「兄姉」に変更して用いた。(c) Crocetti et al. (2008) によって開発された U-MICS を, 畑野・杉村 (2014) が翻訳した U-MICSJ (5 件法, 13 項目) を用いた。Stringer & Kerpelman (2010) を参考に, 「キャリア (現在考えている将来の職業や進学先)」という表現を使用した (コミットメント: $\alpha = .70$, 深い探求: $\alpha = .78$, コミットメントの再考: $\alpha = .67$)。

結果

相関分析 同一視尺度, 心理的分離尺度, U-MICSJ, フェイス項目の各変数間の関連を確認するために相関分析を行った。その際, 同一視尺度, 心理的分離尺度, U-MICSJ の下位因子の平均点を尺度得点とした。きょうだいへの同一視とコミットメントの間に弱い正の相関 ($r = .18$) がみられた。また, きょうだいからの心理的分離は, コミットメント ($r = .33$) と深い探求 ($r = .21$) の間に有意な正の相関がみられた。

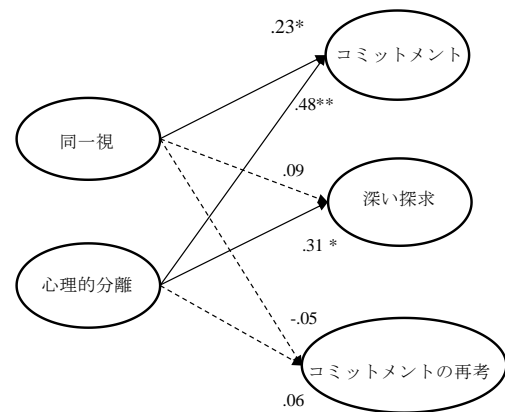
構造方程式モデリング (SEM) きょうだいのとらえ方とアイデンティティプロセスの関連を構造方程式モデリングによって検討した (Figure 1)。なお, 統制変数として学年, 教育学部 (その他学部と区別), 性差を投入した。適合度は, $\chi^2(80) = 126.21$ ($p < .001$), CFI = .91, RMSEA = .08, SRMR = .08 であった。同一視からコミットメントに有意な正のパスが見られた ($\beta = .23, p < .05$)。心理的分離からコミットメントと深い探求に有意な正のパスが見られた ($\beta = .48, p < .01$; $\beta = .31, p < .05$)。

考察

きょうだいへの同一視とアイデンティティプロセスの関連

同一視とコミットメントの間に有意な正の関連が見られたため (Figure 1), 仮説 1 は一部支持された。同一視を示す青年が年上のきょうだいに対して抱く肯定的な感情と, 青年の進路に対するコミットメントの関連が明らかになった。

Figure 1
きょうだいのとらえ方とアイデンティティプロセスの関連



注) きょうだいのとらえ方とアイデンティティプロセスに直接関連があるパス係数以外は省略した。表記のパスは標準化係数。実線はパス係数が有意であることを, 点線は有意ではないことを示す。

** $p < .01$, * $p < .05$

きょうだいからの心理的分離とアイデンティティプロセスの関連

心理的分離とコミットメント, 深い探求の間に有意な正の関連が見られた (Figure 1)。これより, 仮説 2 は支持された。年上のきょうだいから心理的に分離することと, 青年が進路選択において年上のきょうだいとは異なる自己を築いていることの関連が示された。

本研究の意義と今後の展望

本研究から, 青年の進路選択時のきょうだいのとらえ方がアイデンティティプロセス, 特にコミットメントと深い探求に関連していることが明らかになった。進路選択という重要なライフイベントにおいて, きょうだいは青年がアイデンティティを形成する際に非常に重要な役割を果たしていることが示唆されたといえる。今後は, きょうだい関係を対象とした尺度の開発や縦断的研究を行っていくことで, 更に精緻な知見が積みあがることが期待される。

主な引用文献

- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the Life Cycle*, International Universities Press, Inc. (エリクソン, E.H. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- 古見文一・西尾裕美子 (2022). *はじめての発達心理学* ナカニシヤ出版
- (指導教員: 杉村 和美)